

世界はあなたで廻ってる!

H i n a k o & K a k e r u

日向唯稀

Yuki Hyuga

ternity



エタニティ文庫

目次

世界はあなたで廻ってる！ 5

書き下ろし番外編
The 25th birthday 331

世界はあなたで廻ってる！

一夜限りのシンデレラ（雛子）

満員電車と徒歩を合わせて片道四十分の通勤にも、すっかり慣れた今日この頃。入社二年目の私、安藤雛子はふと快晴の空を見上げた。

（綺麗）

丸の内の高層ビル街の狭間に覗く青い空。そこに向かってグンと枝を伸ばす桜を目にした私は、思わずスマートフォンを取り出した。

数秒ほど足を止めて、都会の春を記録に残す。

今年はずいぶん暖かい日が多かったためか、開花宣言が早かった。四月に入ったばかりだというのにもう散り始めている。

（来週のお花見大会まで、半分ぐらいは残ってるかな？ まあ、みんな飲んで騒げる理由があればいいだけみたいだから、気にしないか。さすがに全部散っちゃったらシャレにならないけど。それをネタに盛り上がる人もいそうなものね）

——なんて、出勤前だというのに、ずいぶんのんびりとしたことを考えている。

でも、これは私のOL生活が日々変わることなく、とても穏やかだという証だ。

就職難で失業率も低くないこの時代に、こうして働き口があるのだからありがたい。

特に、持病のために学校へも行けない時期があった私からすれば、普通に生活できるだけでも感謝の気持ちでいっぱいになる。

それを知らない周りからすると、「毎日何が楽しくて、そんなにニコニコしているの？」って感じらしいけど——

そんなふうには言ってもらえない。今の自分が在るだけで、私は幸せだ。

その上、電車を降りてから会社へ向かうわずかな距離の間に、可憐な花々まで見ることができたのだから、自然と顔もほころんでくる。

「おはようございます」

勤め先の部署につくと、私は入り口で声を張り上げた。

フロアの手前側半分ぐらいにいる同僚たちが気づいて、「おはよう」と手を挙げてくれたり、笑ったりしてくれる。

「おはよう、安藤さん。悪いけど部長たちのお茶頼める？ 私、ちょっと出てくるから」

「はい。わかりました」

さっそく用事を頼まれた私は、デスクにバッグを置いてから、部屋の隣に設置されている給湯室へ向かった。

(お茶やコーヒー、そろそろ補充しないと……)

入社したてのころは、蚊の鳴くような声しか出なかった。

それが今では、室内の半分ぐらいまでには、声が響くようになった。

ということは、近い将来には一番奥にいる部長にも聞こえる声が出るはず!

なんて考えれば、未来に希望が増え、喜びも湧いてくる。

こんなことを言っていると、「安藤は悩みがなくていいな」とか「雛子はお気楽でいいわよね」って笑われるけど、本当に私はそう感じているのだから仕方がない。

そして言うなら「君は楽天的でいいね」ぐらいになると嬉しいんだけど。

そうなるためには、やっぱり日々の努力かな?

これはこれで目標の一つとして、今後のエネルギーにしようと思っている。

(あ、係長の湯飲みに茶柱が立った。意外に縁起を担ぐほうだから、今日は一日機嫌がいいかも)

私は専用の湯飲みに三人分のお茶を淹れ終えようと、茶葉の残量を確認してから部屋に戻った。

部長と課長、そして係長にそれらを配り、改めて自分のデスクへ向かう。

私が配属されている経理・総務部には、二十代から五十代までの男女三十五名ほどが三班に分かれて勤務していた。

「花見の予算はどうなった?」

「各部、大まかには——」

その一角で、朝から他部署の人と立ち話をしていたのは、一班の班長、上原さん。

彼はまだ三十代前半だけど、いずれ役職に就くことは間違いなしと言われる敏腕社員。いろいろ資格を持っているから、そういうのを必要としている財務部に異動になるかもしれないなんて噂もある。

クールでちょっと近寄りたいたいところがあるけど、女性社員には人気が高い。普段から身に着けているもののセンスが良くて、おしゃれなのが魅力らしい。

また、フロア中央のデスクで、電話で話す傍らパソコンのキーを叩くのは、二班の班長、岡野さん。

「うーん。どうだろう? 不景気はどこも同じだからね。予算的に余暇施設費から削られるのは仕方ないだろう。あ、でもうちの花見大会は伝統行事でさ、これだけは経費を削られたくないんだよな。どう? 決まったら見にこない?」

去年、念願の赤ちゃんが生まれたばかりの四十代パパさんで、とつても大らかで家庭的な男性だ。

そして、私の席の背後、壁際で年季の入った複合機を相手にほやいているのは三班の班長であり、私が部内で一番仲良くしてもらっている、洋子先輩、こと宇崎さん。

「えー、今日もご機嫌斜めなの？ 買い替えは来期にしたいんだから、もう一期頑張つてよ」

本人は三十目前なのを気にしているけど、ショートボブが似合う美人で、スタイルもすごくいい。

その上はきはきしていて面倒見がよい、部内の姐さんの存在だ。

男性社員にも負けない仕事ぶりと言いつつ物言いかからか、はたまた彼氏がいないという意外性からか、同性からとても人気があって、私も大好きな先輩の一人だ。憧れさえ抱いている。

（洋子先輩ってば、確か去年も同じこと言ってたような……。ってことは、あの複合機は意外と今期も頑張ってくれるかもね）

私はデスクにつくと、さっそくパソコンを起ち上げた。

（茶葉、そろそろ補充したほうがいいんだけど、嗜好品なら、全部署まとめたのほうがいいね。在庫確認してみよう）

経理・総務という仕事内容だけに、決算期さえ乗り切れば、かなり穏やかで安定した職場だ。

逆を言えば、毎日似たようなことばかりが繰り返されていて、それを「つまらない」「もっと刺激がほしい」と言う人もいる。

勤続年数が長くなればなるほどそう感じるようで、中には他部署へ転属願いを出し、叶わなかったからと辞めた人もいたそうだ。

洋子先輩に言わせると、どんな仕事にも向き不向きはあるからね——ってことらしい。（支店のほうはどうかな？ 全社でまとめてメーカー発注できたら、今より確実にコストダウンになるはずんだけど……。事務処理がややこしくなっちゃうから無理かな）

けれど、私はこの落ち着いた時間と淡々とした作業の繰り返しという仕事が好きだった。

性格的にも合っていた。

私は器用なほうではないので、何をするにも黙々とそれに集中してしまい、消極的に見られることが多い。

でも、この緩やかな川の流れのような毎日の中でも、何かしら変化は起こっている。それを見逃すことなく気にかけていれば、これはこれで刺激的な毎日になる。それが楽しくて。

——まあ、さうとう低刺激だけだね。

（うーん。よし！ 一度各社の総務部の担当さんたちに問い合わせしてみよう。塵も積もれば山となる。だし、社員が多いだけに、日々のお茶代だってばかにならないはずだもの）

そんな私の穏やかな日常に、突然波風が立った。

「失礼します！ 営業部の者ですが、こちらに安藤雛子さんはいらっしゃいますか？」
入り口に三人の男性が立っている。

（営業部？ それも三人？）

名指しで訪ねてくる理由が思い当たらない。

相手は「営業部」だけあって、声も大きく伸びがいい。

入り口から部長の席まで響いた声に、部内の人の視線がいつせいに彼らに向かった。

（え？ 何か頼まれたものでもあったかしら？ 担当外だし、覚えがないんだけど……。
それとも私、知らないうちに営業部に係わるミスでもしたの？）

おどおどし始めた私に目を向けたのは、複合機と格闘していた洋子先輩だけだ。

私はビクビクしながら席を立つ。

「はい。安藤は私ですが、何か」

すると、姿勢のよい男性三人が、足早に私のほうへ向かってきた。

一緒に周りの視線もついてきて、緊張ばかりが増してくる。

（何？ なんなの？）

わけもわからず三方を囲まれ、逃げ場がない。

しかも、彼らはいっせいに懐に手をやると、何かを取り出し、完全にビビった私に向

けた。次の瞬間。

「雛子！」

パン！ パンパン！

洋子先輩の声と、彼らが鳴らしたクラッカーの音が同時に響いた。

「きゃっ」

細い紙テープが、悲鳴を上げた私の頭の上から肩にかかる。

状況が呑み込めない私の心臓はドキドキしっぱなしで、ついに指先まで震え始めた。

そんな私に、一人の男性がこれぞ営業用スマイルという笑顔を向ける。

「おめでとうございます！ 抽籤の結果、あなたがわが社のシンデレラに決定しまし
た！」

「……シンデレラ？」

「先日のチャリティ抽籤会、ご応募いただきましたよね？ あれが当籤したってことで

すよ」

「チャリティ抽籤会……」

説明がされると、部内の女性たちから羨望と嫉妬の入り交じった声がかかる。

「ええっ!？」と叫んだのは、洋子先輩ぐらいただ。

それもそのはず、一週間ほど前――

『ねえねえ、みんな見て！　とうとう営業部の有志たちがやってくれたわよ。本当、売れるものなら何でも売ろうって精神よね。こういうのが普段の仕事に生かされてるのかも』

『どうしたんですか？』

『これよ、これ。その名もシンデレラ抽籤会！』

チラシを片手に、そう言って抽籤会の存在を私たちに教えたのは、洋子先輩だった。

『なんですか、それ』

『営業部有志主催の復興宝くじみたいなものかな。当籤者は一名限りなんだけど、景品が笑えるの。なんと社長の三男にして営業部の若手トップ、大門寺翔のエスコートデートだって！　これで運よく恋が芽生えれば、社長の一族にお嫁入り。まさに玉の輿でしょう』

『え？　翔さんと！　それで、シンデレラ抽籤会か。面白そう』

『まあ、実際は申し込み金を使った、年に一度のボランティア活動が目的で、翔くんは完全に客寄せパンダでしょうね。でも、効果は抜群だと思うわよ。彼はまだまだ若いけど、肩書きばかりの社長子息じゃないわ。ルックスはいいし、現場上がりでも仕事もできる男だもの。そういう人を数時間とはいえ、独り占めできるのよ。そんな夢をたつた三百円で見られるなら、安いものですよ。あとで酒の肴にもなるしね』

申し込みは一口三百円。一人三口までの制限つきで、参加は自由。

集まったお金はその名の通り、すべて慈善団体に寄付される。

ただ、私が勤める天保十四年創業の老舗企業、大門寺建設には、本社ビルだけでも一千人近くが勤務していた。そうなるど仮に女性社員だけがチケットを購入したとしても、当籤確率は三百五十分の一ぐらい？

そもそもチャリティなんだから……と、デートは辞退前提の男性社員までも参加したら、当籤確率は千分の一とかそれ以上になるのかな？

さらに本社だけではなく支社まで含めたら、当籤確率はあつという間に一万分の一ぐらい？

もう、よくわからないわ。

『私、申し込み！』

『私も！　これって各部でまとめて営業部に持っていけばいいのよね』

こうなると、洋子先輩の『夢』というたとえは、まさにぴったりだった。

『あ、雛子も一口申し込みましょう。当たり外れは別にしても、チャリティだし』

『はい。お願いします』

『OK！』

自分が当たるとは思えない確率の低さや、チャリティという名目があったからこそ、

私も申し込むことができた。

「さすがに三口でとは言えなかったな……。チャリティなんだから言えばよかったのに、意識しすぎちゃったかも。でも、これってもうデートプランまで決まってるのかな？　だとしたら、それってどんなプランなんだろう？」

ただ、そんなふうに色々と考えたけれど、実際のところ妄想で楽しんだのは、その日のうちだけだった。

年度末の決算時期だったこともあり、すぐにそれどころではなくなった。

しかも決算が終われば、わが社の伝統行事の一つ、お花見大会がある。

周りはその話でもちきりだったし、自然と私もそちらに気を取られるようになっていた。

正直に言ってしまうなら、今日がシンデレラの当籤とうせん発表日だったことさえ忘れていたぐらい。

それなのに――

「ということ、安藤雛子さん。明日の終業後ですが、お時間は大丈夫ですか？　残業予定がありましたら、こちらで上に掛け合いますが、個人的なご都合のほうは？」

「特に何もありません」

なのに私に、こんな名誉な権利が当たるなんて！

「では、決まりですね。終業時間後に本人が迎えに参りますので、準備万端で待っててください。どうしても都合が悪くなったときには、一度だけ延期可能ですから、営業部までご連絡を」

「――はい」

たとえ数時間とはいえ、あの翔さんのデート相手になってしまふなんて！

「じゃ、私たちはこれで」

私は営業部の人たちが去ったあと、信じることができなかった。

（嘘でしょう）

夢だと思っていた時はわりあい現実的に見えていたことが、実際のことになるとこれほど夢のようというか、嘘のように感じるなんて、初めて知ったから。

（なんか……、血の気が引いてきたかも）

足腰から力が抜けて、私は崩れるようにして席についた。

「雛子、大丈夫？　顔が真っ青よ」

よほど顔色が悪くなっていたのか、洋子先輩が声をかけてくれる。

「はあ、びっくりしちゃって」

「そりゃそうよね。私も自分のことのようにびっくりしてるもの。そもそもくじなんて、外れるためにあるものだと思ってたし。ねえ……」

けど、どんなに驚こうが青くならうが、これが現実なのだ。私が理解するのは早かった。

「うっそー！ 彼女が当てたの？」

「あの子が翔さんとデートするのは？ たとえ数時間とはいえ、羨ましいっ」
私の当籤話は、部内どころかすぐに社内にも広まったのだ。

（あの子が、あんな子に聞こえてくるのは被害妄想かな？）

社内には三口申し込んだ、翔さんとデートを熱望していた人たちが溢れていたわけだから、私の身の置き場なんかどこにもない。

食堂でランチをとっている時なんか、四方八方から向けられる視線が痛いぐらいだった。

私の話をしている声があちらこちらから聞こえてくる。

「営業も、もう少し考えてあげればいいのにね」

「本当……。抽籤に不正がないのはわかるけどさ。多少なりにも釣り合っているものがね」
退社するころには、二十五階建ての自社ビルの上から下まで、噂話でいっぱいだった。

「でも、考えようによっては、よかったんじゃない。変に綺麗な子や可愛い子に当たるよりは」

「そう言われたら、そうだね。美人揃いの秘書課の誰かに当たるよりは安心か」

「でしょう」

こんなとき、会社が大きく、社員が多いっていうのは不運だ。

どうやら私は三百円で、とても多くの人から嫉妬を買ってしまったようだ。

とはいえ、これまで会ったこともなければ、話をしたこともない人にまでヒソヒソ話をされるってどうなの？

（翔さんとは釣り合わない。だから安心して——）

帰宅する私の足取りは、めっきり重いものになっていた。

二十四にもなつて容姿のことを言われるのは、とても切なかった。

自分が特別綺麗な子でも可愛い子でもないのはわかっていたことだし、胸が大きいわけでも、足がすらりと伸びて細いわけでもない。

ウエストだって……急には細くならないわ。

（なんか、天国から地獄ってこういうこと？ ううん。天国にいた覚えもないのに、いきなり地獄？ それってひどくない？）

きつと、私には他人から見ても魅力的だなんて思うような部分なんか、ない。

頭のとっぺんからつま先まで、これだけはよく褒められるの、自慢なのよ——なんというところも一つも思い当たらない。

肩まで伸びた髪が特別艶やかなわけでもないし、まつ毛が長いわけでもない。

手も指も爪もごくごく普通で、背丈も標準そこそこ？

しかも、俗にいう童顔——!?

なら、頭がいいのか、勉強ができるのかと聞かれたところで、それも中の中としか答えようがない。

この会社を受かったことだって、奇跡だった。

せめて「健康だけが取り柄なの！」って言いたいけど、それこそ私にとっては永遠の憧れで……

どんなに探しても、自信を持てる場所は一つもない。

あるとしたら、運だけ？

(いっそ、辞退したほうがいいのかな？ それとも急用を作ってキャンセルする？ 一度だけ延期可能って言ってたし)

面と向かって「ブス」って言われたことがないだけ、幸せだったのかもしれない。

でも、「目立たない」とか「埋もれてる」とか「あ、いたの！」はよく言われるし。「存在感なさすぎ」とか「記憶に残らないタイプ」っていうのもあったかな。

考えれば考えるほど、私っていったい何？ って思う。

けど、これって何か寂しい気がする。

これまでは気にもしてなかったけど、こんな形で確認させられると——ね。

(でも、せっかくの企画なのに、辞退したら、わざわざ予定を組んでくれる営業部の方や翔さん本人に申し訳ないし……。それに、彼とデートしてみたいのは確か。だからこそ抽籤会ちゆうせんかいにも申し込んだんだし——)

私はいつになくあれこれ考え込んで、うっかり電車を乗り過ごしてしまった。気づいた時には地元駅を三つも越えていて、余計に凹こぼむ。

いったい何してるんだらう、自分で自分に追い打ちをかけてどうするのよ——

(ああ、もう！ とりあえず、一度冷静になって考えるのよ、雛子。そもそも、どこにいても埋もれちゃうような私に、この先彼と一対一で話ができるような機会があると思う？ 営業部に係わる仕事は自分の担当じゃないし、用もないのに声をかける度胸なんか私にはないでしょう？ 仮にあったとして、デートにこぎつけられる？ それこそ天地がひっくり返ったって、ありえないじゃない)

そんなふう到底の底まで落ち込んだら、あとは居直るだけだった。

とりえのない自分と真正面から向き合ってこそ、気づいたことがあったから。

(だとしたら、これってやっぱり一生に一度のチャンスなのよ。彼は大物で人気者なんだから、これを逃したらこんなこと二度とないわ。たとえ一時間でも三十分でも——五分でも。夢を現実に変えられるチャンスは今だけのはず。何もない私だから神様が情けをかけてくれたって考えれば、つじつまも合うしね)

そう、あれこれ悩んだところで彼が私にとって、途方もなく偶像的な存在であることに、間違いはなかった。

社長子息という以前に、近くににいるけど遠い人。

見ているだけで満足してしまうような、憧れるだけの存在であることに違いはないんだから、この機会を逃したら一生後悔する。

せっかくの幸運を自分から手放すなんて、それこそもったいない！

（よし！ 決めた。明日のデートが終わるまで、全力で楽しもう。悔いが残らないように、ベストを尽くそう）

私は、下車した駅の反対側のホームへ向かうと、明日の今頃何が起こるか想像し始めた。こればかりは実際に事が起こってからは、楽しめない。

それこそすべてが終わってしまっただけでは、二度と——
だからこそ、ここからの二十四時間を堪能しよう、今だけのシンデレラ気分を目いっぱい味わっておこう、と。

はめられた王子？ 　　（翔）

とつくに定時を過ぎたのに帰れない。これから「接待」という名の残業があるからだ。

「翔、ちよつと」

「はい。なんででしょうか、橋本係長」

俺、大門寺翔は祈るような気持ちで、橋本係長のデスクに向かった。

（おいおい、これ以上仕事を増やすのか？ 勘弁してくれよ）

橋本係長は俺の直属の上司。二十代にして海外支店で驚異的な営業成績をたたき出し、三十になって凱旋帰国。そのままこの本社営業本部の係長のポストを手にした、誰もが認める逸材だ。

俺の生きた教科書の一人でもある。

「実はな」

そんな橋本係長は軽い口調で俺を呼び寄せ、ニヤツとしてから用件を話し出す。

（なんか雲行きが怪しいな）

いやな予感にかられた。

こんな展開で無茶ぶりをされた経験が、過去に数えきれないほどあるからだ。「これなんだが——」

もちろん、仕事なら仕方がない。大概のことなら「わかりました」と快諾する。どんなに社長の息子だなんだと言われたところで、実際は無役の一社員だ。

しかも、この部署には俺よりあとから入社した奴がいらない。ということとは、どう足掻いても最下層に位置するのは俺ってことだ。

ただ、そうは言ってもここは老舗の大企業、大門寺建設本社の営業本部だ。大門寺グループ全体の営業部を総括するだけでなく、グループ内でも桁違いな大事業を展開している。

本来なら入社五年目程度の俺がいられるような部署じゃない。

通常の営業マンなら、極寒の北海道支社あたりからスタートして、積雪の中をパシリにされつつ研修や修業をすることになる。

もしくは橋本係長のように、いつそ海外支社からいつてみようか！で、徐々に国内、首都圏の支社へと戻ってきて、最後がこの本社だ。

それに比べれば、野生の熊に遭遇することもない大都会、しかもちゃんと母国語が通じる所で駆けずり回るぐらいいはなんてことない。

ありがたいことだ。

このあたりは親の七光り——いや、さらにその上をいく祖父、すなわち会長の七光りだけだな。

「ということぞ！明日の終業後は当籤者とのデートだから、これでよろしくな」

だが、だとしても、今日の無茶はこれまでで最たるものだった。

橋本係長は、諸経費と書かれた茶封筒を差し出しながら、土足でプライベートにまで踏み込んできた。

「何の冗談ですか」

真顔で返した俺に、彼の満面の笑みは崩れない。

これはもう営業用スマイルじゃない。正真正銘確信犯がしてやったりと浮かべる笑みだ。

「マジもマジ。すでに夏目氏にも言って、スケジュールは調整済だから」

それもそのはずだ。

俺は今の時点で、完全に外堀を埋められていた。

「夏目に!?」

夏目というのは、祖父からつけられた俺の専属秘書兼教育係で、その上私生活の見張り番も兼ねていた。

要は、大門寺翔という人間の一切台財を監視している管理人のような男だ。

そして、この専属秘書という存在は、俺の年の離れた母親^{まほ}違いの兄、長男^{まなぶ}と次男^{まなび}にもそれぞれついている。

通常業務に加え、ゆくゆくはわが社を担う幹部候補生として修業中の俺たちを、公私の別なくあれこれとサポートしているわけだ。

俺からすれば、望みもしないのに押しつけられた疫病神^{やまびょうがみ}だけだな！

「ちょっと待ってくださいよ。だからって、人のプライベートタイムまで奪おうついでうんですか。しかも完全な事後承諾^{じこしょうたく}あり得ないですって」

「何を言ってるんだよ。次期社長選^{せん}まった中なのに、プライベートタイムも何もないだろう」

確かに、こここのところ次期社長選の準備として接待やら何やらが続いている。

しかも、橋本係長が言うように、俺たち三人は会長命令で次期社長の座を争うように仕向けられていた。

それが、けっこうな骨肉^{こつにく}の争いになっていて、近年俺は兄たちから嫌味以外の言葉をかけられたことがない。

兄同士なんか、もつとひどい。できる者同士^{ようし}だから、一度ぶつかると最悪だ。お互い容赦^{ようしや}がない。

あれはもう、社長の席がどうこうというよりも、「俺のほうがお前より優れているんだ」

と主張したいだけだろう。が、そんなの俺からすれば、長男がやればいいじゃないかって話だ。

せっかく二人とも優秀なんだから、長男が社長で次男が専務。二人で仲良く会社を盛り上げて、どうか俺のことは放っておいてくれ！ その眼中からどかしてくれ!! つていうのが本音だ。

だってそうだろう？

誰が、こんな化け物みたいな会社のトップになんかなりたいものか。

資本金八百億の会社って、わけがわからねえよ。

創業が天保十四年？ 俺の頭じゃ大正、昭和の歴史だってあやしいぞ。

その上、本社と支社を合わせて社員が七千五百人余り。準社員から子会社、孫会社、ひ孫会社まで合わせたら万単位だ。

大門寺建設関係者だけで、武道館どころか東京ドームの客席が全部埋まるんだぞ。

バブルがはじけて以来、リストラにリストラを重ねたのに、この規模だ。

そのトップに「われこそが」なんて名乗り出られるのは、ごく限られた人間だけだつて！

少なくとも、自分の営業成績^{えいぎょうせいせき}だけで手一杯の男が、夢や野望に抱くレベルじゃない。そういう意味では、俺は分^{ぶん}をわきまえた男だからな。

「ああ、そうですね。確かに明日の夜は接待が入っていました。でも、それが先方の都合でキャンセルになってくれたから、俺は久しぶりにフリー！心行くまでプライベートタイムを満喫する予定なんですよ、週末の夜を！」

とはいえ、歴史と伝統と数万人の社員とその家族の生活を長い間背負ってきただけでなく、戦後の日本を再建した男の一人」と言われる祖父の言葉は絶対だった。

『不向きだと判断すれば、馬鹿な人事はしない。とにかく、やれる限りのことはやって、お前という男の能力を見せてくれ。頼む——』

そう言って、一度は「いやだ」「無理だ」と駄々をこねた俺、とき若造に、ちゃんと頭を下げてくれた男に対して、不義理なまねはできなかった。

むしろ、父の後妻の子である俺（生まれたときから次世代を担うために徹底教育されてきた東大や海外の有名大学卒の兄たちと違って、地元ワルの中でも一匹狼で通っていた平成生まれのやんちゃ坊主）にまで、兄たちと同じ機会が与えられたことには感動さえして……

『わかったよ。なら、やれる限りのことはやってみるよ』

俺は、持ち前の男気のままに返事をした。が、それが若気の至りであり、大間違いだったんだ。

『では、今日からこの者がお前を指導するので、しっかりやるんだぞ』

『は？』

そもそもあの時——縁故入社からまだ二年足らずで、支社の土木建築部の最前線の現場にいた俺は、自分が何を目標に頑張らされるのかさえ、よくわかっていなかった。

兄たちと共に大門寺建設の社長を目指すということが、いったいどういうことなのか、想像さえできていなかったんだ。

『夏目と申します。私が参謀としてつくからには、絶対に負け戦は許しません。この戦には必ず勝利し、あなたには何が何でも次期社長の座に就いていただきます。たった今から、そのおつもりで腹を括ってください。よろしいですね』

『なんだとっつっ?!』

その瞬間、俺には秘書という名の悪魔が憑いて、職場もこの部署に変えられた。

将来自分が社長秘書兼相談役という重役を手に入れるために俺を社長にしようという冷酷無慈悲で、なおかつ「だったら自分が社長になればいいじゃないかよ」ってぐらいい超優秀なケンブリッジ大学卒、とかかっていう悪魔に脅かされつつ、日夜仕事と勉強で雇字捌めにされている。

しかも、そんな悪魔には随所に手下がいるんだ。

「それなら、プライベートはデートで満喫ってことで」

「どこの誰ともわからない相手と社用ですか」

「相手は総務部の安藤雛子さんだが、シンデレラ抽籤会ちゆうせんかいのイベントは、わが営業本部の有志たちで企画したチャリティイベントだ。だから社用じゃなくて私用だ。このデート経費も有志たちのポケットマネーから出てるしな」

いつの間にか社内外のあっちにもこっちにも「翔派」と呼ばれる支持者のグループが作られていて、俺のあずかり知らぬところで、俺を次期社長にするために必要な人脈だの社内の人気だのを築こうと動いているんだ。

こんなふうには！

(どんなことにつけなんだよ、それは……)

俺は、橋本係長から「チャリティ」「有志たち」と説明されたところで、こいつやその一派は確実に夏目と内通してるな——と確信した。

かといって、それがどうしたら「抽籤でデート」になるのかはまったく理解できなかったが、橋本係長が見せてくれた募金総額だけで判断をするならこのチャリティとやらは、俺が景品けいひんになったことで寄付がいっぱい集まった、例年にない大成功だ。万歳ばんざいってことになる。

女子社員の人気やプッシュ、口コミも馬鹿にならないから、きつとそのあたりも狙っているんだろう。

なんにしたって、仕事終わりの二時間、三時間を提供するだけで、チャリティのこと

なんか何も知らされていなかった俺の評価は勝手に上がり、人気も高まっていくんだから、見事みごととしか言いようがない。

年や学歴の差と同じくらい開いている、兄たちとの社会経験の差。これを少しでも埋めるには、仕事以外のところでも頑張るしかない。せめて俺の年だったころの兄たちに負けないように、いや、それ以上だったと評価されるように、あれこれ行動を起こすことが義務づけられているんだから、ここで文句を言ってる場合じゃない。

なんだよそれとへそを曲げず、素直に感謝するのが筋なんだろう——本当は。

「いやー、それにしたって、今回はよく集まった。やっぱり翔を餌にしたのは効果絶大だったな。さすがはわが社一のイケメンだ。恋人にしたいナンバーワン男だよ」

とはいえ、ここまで打算が見え見えだと、気が重い。

(要は、俺が兄たちに勝てるのは見た目だけって言いたいんだよな。橋本係長——さわやかなキャラのくせして、侮れないおそむ。もしかしたら、こいつから夏目に近づいた可能性もあるし。もともととしたたかで出世欲しゅつせよくが強いのが、仕事に表れてるしな)

何も知らずに抽籤会に参加してくれた人たちに、ひたすら申し訳ない気分になってくる。

(それにしても、総務部の……誰だっけ?)

デートに当たったとかいう相手にも——

「と、話はこれで終わりだ。そろそろ時間じゃないのか？ 確か今夜は会長直々に招待したっていう、お偉いさんたちとの顔合わせだろう。それも三兄弟そろって」

「あ、はい。そうです」

だが、今夜の俺はこれ以上明日のことを気にしている余裕がなかった。

悲しいかな、これが現実だ。

「くれぐれも慎重にな。会長が利用するような料亭は、夜の霞ヶ関って言われるくらい、大物ばかりが集う魔窟だ。誰と会ってもビビるなよ」

「はい」

今、俺が抱えている仕事の大半は、公共事業関連だった。それも耐用年数を超えた施設の建て直しや補強工事といった、絶対に先送りできない内容のものばかりだ。

それで今夜のような場違いな席に俺まで呼ばれて接待する羽目になっている。少しでも今後の仕事に役立つようになってことなだらうけど。

それにしたって、本来なら俺みたいに若僧の営業マンが担当できるような仕事でも、相手でもない。

こんなことができるのも、俺が、社長子息で、会長が選んだ次期社長候補の一人だからだ。

そして、悔しいけど夏目の的確な助言や入れ知恵のおかげだ。

（切り替え、切り替え！ 気持ちえ切り替えろ）

俺は自分のデスクに戻って資料をまとめ、それらを鞆に詰め込み支度を整えた。

この部屋にはほとんど出入りしない夏目だが、俺が出る時間を見計らってすでに表に車を用意して、待っているだろう。

——なんて思っていたら、スマートフォンに夏目からメールが届いた。

やばい、急がなきゃ！

「橋本係長。では、行ってきます」

俺は一声かけてから、出入り口へ向かった。

「おう。頑張れよ。俺はお前を応援してるからな」

（うわっ、なんてあからさま。俺の出世は、お前にかかっているんだぞって、堂々と脅してきたようなもんじゃないか）

本当に、何から何まで身分相応とは思えない状況だった。

いったいこんなことがいつまで続くのか——それは会長と社長のみぞ知る。

（夜の霞ヶ関……魔窟か。いやいや、こっちは久しぶりに兄たちと同席するだけでも、すでに魔窟状態だって。胃に穴が開きそうだ）

とはいえ俺は、「不向きだと判断すれば、馬鹿な人事はしない」という祖父の言葉を信じて、日々やれる限りのことをしていた。

何も「不向きだ」と判断してもらおうために頑張らなくてもって思うけど、自分で「やる」と口にした責任だけは——
 そう心に決めて。

初めてのデート　　く雛子

「こうなったら全社員に嫉妬されても行く！」

「それぐらいの覚悟で決めた当籤デート。」

それなのに、私は着ていく服が決められなくて、朝まで眠れなかった。

徹夜で運命の日を迎えてしまった。

（顔色悪い……。なんだか目つきも悪くて、全体的にむくんでる？）

鏡に映った自分の姿は、近年まれに見る最悪さだった。

自分でも、こんなにブスになってる顔は、見たことがない。

これだけで人生が終わったような気分。

朝食も満足にのどを通らない。

ここまで自分が小心者だったなんて、と改めて思い知る。

（やっぱ昨日新しい服を買に行けばよかった？ でも、そもそもデートなんかしたことがないから、買に行ったところで選べないわよね。何をどうしたらいいのか、さっぱりわからないだろうし。だったら先に先に中身だろう。エステにでも行ってこい。って話かもしれない。ああ、どうして今になって。もっとしておけばよかった。ことが次から次へと思ひ浮かぶんだらう。日頃のケアが大事って、こういうことなのかもしれないな）
 どうにか支度を整えると、習慣にしている野菜ジュースだけは飲んで、家を出た。
 家族には昨夜のうちにチャリテイ抽籤で当たったことも、今日の仕事のあとにデートイベントがあることも伝えていた。

別に彼氏ができたわけじゃないし、本当のデートってわけでもないから、彼らは終始「へー」とか「ふーん」って言って感心していた。

何にって言えば、私の運の良さだけに。

要は、「社長の息子が相手なら、きつと美味しいものをご馳走してもらえるな」って、そういうノリ。

まあ、だからこそ私が服装で悩んでいた朝、フォローもしてくれただけだね。

「ドレスコードがあるような店だったら困るから、ワンピースにコートぐらいが無難だぞ」って。

（でも、だからって——。悩んだ末に弟に決めてもらうってどうなの？ 私が選ぶよ

り何倍もセンスがいいとは思うけど。それで決めてもらった服が、クリスマスにお兄ちゃんが買ってきてくれたワンピースって……。なんだか情けないことばかりだわ。この服、落ち着きのあるパステルピンクで、形もすごく可愛いんだけど、私には派手じゃないかな？ 丈も膝上で、いつものより短いし。足……、今日だけでも、細く長くならないかな。ヒールを高くしたけど、少しぐらいは長く見えてる？」

昨日は快晴の空を見上げる余裕さえあったのに、今日はだめだった。いろんなことが原因で、つい足元ばかり見ってしまう。

アスファルトの細かい凸凹^{でこぼこ}までじつと……

「おはようございます」

おかげで朝の挨拶も、蚊の鳴くような声。

気持ち切り替えてちゃんと声を出したつもりでいたけど、実際は出入り口付近の人にしか聞こえてない。

なんだかなあ——もお。

すると、背後から突然肩をポンとたたかれ、声をかけられた。

「あら、可愛い。デート仕様だとこうなるのね」

驚いて振り返る。私を見て「おはよう」って笑ったのは、洋子先輩だ。

「本当ですか？ 少しはマシに見えますか？ 変じゃないですか？」

私はここぞとばかりに確認した。

胸にたまっていた不安が一気に出てしまう。

こんなこと聞かれたって、困るだろうに……

すると、洋子先輩はちょっと噴き出した。

「マシも何も、どうせなら普段からこういうのを着てくればいいのに。雛子は女の子の子してるんだから、春めいた色や可愛いデザインのほうが似合うもの」

「そうでしょうか？」

「うん。それに、もう二年目なんだし、リクルートスーツは卒業でもいいんじゃない？ ここは制服がある会社じゃないんだから、節度さえわかまえば、かなり自由よ。もつと個性を出しても平気だから」

洋子先輩の何気ない言葉は、かなりの不安を取り除いてくれた。

「心がけてみます」

「そうそう、その意気よ。じゃ、仕事にかかろうか。くれぐれも浮かれてミスしないようにね。それこそデートどころじゃなくなっちゃうからね」

「はい」

自分のデスクに向かった洋子先輩は、普段からタイトでシックな装いが似合う大人の女性。

私みたいに年相応に見られたことがない童顔と違って、どんな時でも艶っぽくて素敵だ。

そんな女性が言ってくれた「可愛い」は、やっぱり親兄弟から聞くのとは大違い。たとえお世辞だとしても、^うやったー！^うって思えて、足取りが軽くなった。

（女の子の子してるって、一応褒め言葉よね？ でも、リクルートスーツを卒業するとなると、これから毎日、着ていく服で悩みそう。そういえば、他の人はどんな服着て来てるんだらう。これまでに気にもかけてなかったからな……って、こういうところがだめなんだろうな）

私は足早にデスクへ戻ると、気持ちを切り替えてパソコンに向かった。

起ち上げてメールを確認すると、昨日送った各支社へのアンケート形式の問い合わせに、さっそく返事が届いていた。

（あ、嗜好品アンケートの返事だ）

内容はとてもささやかなものだけど、私にとっては初めて自分から起こした行動の結果。

ドキドキしながら目をやった。

（——やっぱり賛否両論か。でも、それができたらありがたいけど事務的に面倒、無理そうっていうのが理由で、反対ってことじゃないわよね。そこがスムーズなら、年間

のお茶代も馬鹿にならないし、安く済むならそれに越したことはないっていうのはほぼ全員一致だし——）

今のところはまだまだ前途多難だけだね。

緊張しつつも慌ただしい一日は、あつという間に過ぎていった。

（もっと一日を長く感じるかと思ってたけど、急ぎ仕事が多くなったせいで、もう夕方だわ）自分の予定では、ドキドキハラハラしながら刻々と迫る終業時間を迎えるつもりだった。

けど、それこそ予定は未定。追い立てられるように仕事をするうちに、定時となった。それも作業が押ししてしまって、三十分のサービス残業付き。

（急いで化粧直しにいかなきゃ）

私は時計を見ながら、焦りまくる。

すると、席を立つと同時に、出入り口付近が騒がしくなった。

（え!? まさか、もう来ちゃったの？ 営業って一時間押しとかざらって聞いてたのに）「来た！ 本当に迎えに来たわよ、翔さん」

私の予感は大当たりだった。

ここへは年に数回しか姿を見せない彼、大門寺翔さんが向かって来た。それを見つけ

た先輩の一人が、歓喜の声を上げる。

「カッコいいな。スマホ見ながら歩いてるだけなのに、素材がいいと、何をしてても様になるのね」

その姿は私の席からも見る事ができた。翔さんは、片手を春物のコートのポケットに突っ込み、片手でスマートフォンを操りながら歩いてくる。

フルオープンになっている総務部の出入り口まで来ると、いったん止まってスマートフォンをロックする。

それをコートの内ポケットにしまつて——中を見回し始めた。
でも、その顔はなんとなくそっけない？

仕事じゃないからいつもの笑顔で……っていうのは無理なのかもしれないけど、それにしたつて不機嫌そう。

「機嫌悪そうじゃない？ 何かあったのかしら？」
「うーん。普通に疲れてるんでしょう。彼、そうとうハードワークだし」

周りも同じことを考えていた。
彼は喜怒哀楽を言葉にも顔にもはつきり出すことで有名なだけに、この仏頂面が気にかか

かる。
こんな時にデートなんて、それも顔見知りでもない相手との義務的なデートなんて、

どうなのかしら？

私は嬉しくて天にも昇る気持ちだけど、よくよく考えたら、翔さんにとつてはどうなの？

ボランティア活動の延長だとしても、本音は面倒くさいとかいやとかじゃないのかな？

それこそ私が辞退したほうが、彼にとつては楽だった？
少なくとも、あんな顔させずに済んだのかな？

(どうしよう……。デートして、いいのかな)
私の中に再び迷いが生じ始めた。

自分ばかり浮かれて、この瞬間まで彼の気持ちを考えなかったことに気づく。
ちょっと考えればわかりそうなことなのに。

企画とはいえ、もしも自分が知りもしない男性とデートなんてことになったら——
ねえ。

「えーと、ごめん。名前忘れちゃった。シンデレラの抽籤会で当たったのって、誰？
ここの子だつて話だけは覚えてるんだけど——」

と、突然翔さんが声を発した。

どうやら私の名前を思い出そうとして、眉間に皺をよせていたみたいだった。

「安藤さん！ 翔さんのご指名よ」

近くにいた先輩の一人が、嬉しそうに声を上げた。

翔さんから話しかけられただけで、頬がほんのり赤くなっている。

その気持ち、すごくわかる——

それだけに、私の覚悟が崩れそうになる。

「ほら、雛子。固まってないで、行った行った」

様子を見ていた洋子先輩が、私の背中を押してきた。

「あっ、はい」

まだ化粧も直してないのに——なんて思ったところで、もう遅い。

迎えに来る前に仕事が片付いていただけでも、ラッキーだった。

これで相手を待たせるようなことになっていたら、目も当てられない。

(なんか、膝がガクガクしてる)

自分のデスクから出入り口までの距離が、こんなに遠いと感じたことはない。

自分でも笑っちゃいそうなくらいに緊張してるのがわかる。

「えっと、当籤者？」

「はい」

だって、こんなに近くで彼を、翔さんを見たのはあの日以来なんだから。

そう、あれは記念すべき入社式の朝のことだった。

私は入社途中で初めて彼を見かけた。

(——わ、いまだきトースト啜くわえて出勤？　なんか、中高生でも見かけないような姿なのに、これでカッコよく見えるってすごいな。もしかして、どこかでドラマの撮影してる？)

もちろん、彼は覚えていないだろう。

駅前の交差点で信号待ちをしていたときに、私と隣り合っていただけだし。

それに、あのときはもつとすごいことが起こった。

突然反対車線で起こった交通事故だ。

『きゃっ——っ！』

バイクと車が接触し、一瞬のうちにバイクが倒れて運転手が放り出された。

しかも、ぶつけた車が逃げたという最悪な事故で——

誰もが驚愕きょうわくで足がすくんでいた。

反射的に動いた人はいたけど、その動きには「どうしよう」という戸惑いが見えた。

ビジネス街でサラリーマンとOLしかないような時間帯。医者でもない限りそんな

反応でも仕方がない。

けど、その中でいの一番に大声を上げて走り出したのが翔さんだった。

『触るな！ 救急車を呼べ!!』

彼は手にした靴と食べかけのトーストを放り出すと、迷うことなく倒れたバイクの運転手に近づいた。

自分が着ていたコートを脱いで、冷えたアスファルトに放り出された運転手にそれをかけ、救急車や近くの交番から警察の人が駆け付けけるまで、その場で交通整理をしていた。しかも、逃げた車の車種や色、ナンバーの一部をしっかりと覚えていたみたいで、彼はそのまま警察で事情聴取を受けることになってしまったから、私はすっかり忘れられていた彼の靴を持って追いかけて——

『あの、これ!』

警察に同行していく彼に、どうにか靴を手渡した。

『あ、サンキュ。悪いけど、落としたパンも片付けといて』

なんの遠慮もなく、にこっと笑って頼んできたのが印象的だった。

『はい』

たぶん、あの瞬間に私は恋に落ちていた。

(これって、やっぱりドラマの撮影じゃないのかな?)

放り出されたトーストの後片付けをしながら、こんな時にとても不謹慎だけど、本当にこんなことが日常の中で起こるの? って、思ってしまった。

その上、そんな彼が同じ会社の人だったって知った時には、もう——運命さえ感じて。

『聞いた? 昨日の話』

『駅前の事故のことでしょう。聞いた聞いた! 翔さんのお手柄で逃げたほうの運転手、即日捕まったらしいじゃない』

『それもあるけど、被害者のほうも一命を取り留めたんだって。翔さんの指示で、下手に動かさなかったのがよかったみたい。警察から感謝状が出るとか出ないとかって話だよ』

『すっごーい!』

あれ以来、私は密かに片思い中だ。

とは言っても、声をかけるところか、目も合ったことがないから、いまだにドラマのヒーローにでも恋をしているような感覚なんだけど——

(わ、久しぶりに近くで見ただけど、やっぱり背が高い)

そんな彼が目の前に立ったものだから、私の心臓ははね上がった。

さっさまでの不安はどこへいったの?

彼の立場は? 気持ちは!?

(軽く頭一つ分くらい差がありそう。これでもいつもより高いヒールを履いてきたのに、下を向いてもらわないと目線も合わない。自然と上目づかいになっちゃうんだけど、失

礼じゃないかな?)

だめだ——目の前のものしか見えない。

他のことに気が回らない。

「じゃ、とりあえず行こうか」

その言葉に甘えていいの？

彼は嫌々こんなことを引き受けているかもしれないのよ。

企画だから、仕方なく——

「はい。あ、今バッグを取ってきます」

それなのに、私は急いでバッグを取りに戻ると、翔さんと部屋を出た。

(少しだけ……。少しだけなら、許してもらえる?)

男性からはからかうような、女性からは妬ま^たしげな「いつてらっしやい」の声を背中に浴びて、歩幅の広い翔さんのあとを足早に追いかける。

この時点で辞退する気なんかまったくなし！

自分がこんなに強欲^{ごうよく}だったなんて、知らなかった。

でも、だから罰^{ばち}が当たったのかな？

(あ、またスマホを出した)

部屋から出てエレベーターホールに向かう途中、翔さんは私の二歩ぐらい前を歩きな

がら、再びスマートフォンに視線を向け始めた。

(よくわからないけど、デートってこういうものなの？ それとも急用の仕事メールか何か入った?)

歩き始めてまだ一分も経っていないのに、なんだか上司の付き添いで、外回りにも行くみたいな気分になってきた。

そもそもデートとはいえ、仕事の延長みたいなものだし、変に期待しすぎたのかな？ たとえ数時間でも彼の笑顔を独り占めできる！ なんていうのは妄想の産物？

むしろ妄想だけしていたほうが、幸せだった？

(それにしても、歩くのが速いわ。さすが営業？ それとも足の長さの違い？ ああ、ヒールの高い靴になんかしなければよかった。そうでなくても、普段からそんなに速く歩いたり、走ったりなんてしないのに)

私は次第に胸が苦しくなってきた。

一応一緒にいるのに、見てもらえない。会話ひとつない。隣に並んで歩くことさえできな

くない。慣れない高さのヒールのためか、足がもつれそう。

けど、翔さんはスマートフォンしか見てなくて——

(あ、エレベーターの扉が！)

扉が閉まりかけたエレベーターにいきなりダッシュユされたものだから、私は完全に置いてけぼりを食らった。

(嘘っ)

無情にも扉が閉まってしまい、私は泣きたくなくなってきた。

もう、ここまでにしたほうがいいってこと!?

「何してるんだよ。早く乗れよ」

「——っ、すみません」

中から扉を開けてもらえなかったら、私はきつとこの場でしゃがんで泣き出していた。彼の瞳にほんの一瞬自分が映ったことに、すごくホッとした。

(ほほ満員のエレベーター。私が乗ってブザーが鳴ったら、どうしよう)

最後に乗り込むには勇気がいる状況。

(私、どうしてこんなことになってるんだろう?)

こんな時に限って、入り口付近に乗っていたのは背の高い男性ばかり。

普段の私なら、絶対にスルー。やり過ごして次を待つような状態だ。

すると、二の足を踏んだ私に、翔さんが場所を作ってくれた。

「ちょっと、失礼。ほら、こっち」

「あ、はい」

操作ボタンの前に一人分のスペース——しかも、私の後ろには彼だけだ。

(うわっ。これだけでも守られてる気分)

相変わらずその手にはスマートフォン、視線もそれに向けられたままだけど、私の気分は一気に浮上した。

だって、この瞬間はシンデレラ。

翔さんは私だけの王子様——そう思っても、罰^{ばち}は当たらないでしょう?

(もう、これだけでいいや。一生の思い出になったわ)

エレベーターで二十階から一階まで降りるのなんて、あつという間のことだった。

でも、私にはこれぐらいがちょうどいいのかもしれない。

心臓が張り裂けそうなほどドキドキしてる。

このまま一緒にいたら、かえって何か失敗して、悪印象だけが残りそう。

そんなことになるぐらいなら、ここで終わらせたほうが——ね。

(あ、まだ人目があるから、表までそれっぽくしといたほうがいいかな。一応イベントだし)

一階でエレベーターを降りると、私は再び翔さんを追いかけながら、エントランスフロアを歩き始めた。

会社から出てようやく連絡が済んだのか、スマートフォンが彼のコートの内ポケット

に戻される。

と同時に、翔さんが立ち止まった。

さて、どっちへ行こうか——そんな感じかな？

私は思い切って、声をかけた。

「あの、もう……、ここでいいですよ」

「あ？」

「デートのことです。私、ここで帰りますので」

今にも口から心臓が飛び出しそうって、こんな感じなのかしら？

それでも行き交う人や車の騒音で消されないように、はつきりとした話し方を意識した。

「帰る？ まだ会社から出てきただけなの？」

「はい。でも、ここまで一緒にいただけで、十分楽しかったですし。宝くじに当たった気持ちも体験できたので」

感謝を込めて、ありがとうございましたって、できるだけ明るい笑顔で。

「けど、当たった宝くじは換金しなかったら意味ないだろう」

「宝くじなんてそもそも当たった時のことを想像して楽しむだけで、元は取れますよ。

それに、今回の応募自体がチャリティですから、当たらなくても最初の目的は達成で

きてますし」

でも彼は責任感が強いのかな？

もっとあつさり「そう」とか「いいの」とかって快諾かくだくしてくれると思っただのに、そうはならなかった。

「要は、別に俺が目当てだったわけじゃないから、景品のデートはいいってこと？」

私、もしかして彼を怒らせた？

翔さんの顔つきが見る間に険げんしくなってきた。

「いえ、そういうことじゃないです」

「なら、どういうことだよ？ こっちはデート代まで預けられてるんだぞ」

「でしたら、それもチャリティの寄付に」

コートのポケットから茶封筒を取り出した翔さんは、私が何か言えば言うほど機嫌が悪くなっていく。

「つまり俺とデートするのがいやだってことか。チャリティで寄付しただけなのに、こんな景品が当たってかえって困るって、そういうことか」

あれ？ あれれ？ どうしてそんな解釈になっちゃうの？

いかにも嫌そうっていうか、面倒そうな顔してたのは、翔さんのほうなのに——
「そうじゃなくて」

「じゃあ、なんなんだよ」

もう、わけがわからなくなってきた。

一つだけわかることは、私——彼に嫌われた？

よかれと思ってしたこと嫌われるって、よっぽど相性が悪いってこと？

「か、翔さんのほうが大変かなと思って」

「俺が？」

「いえ、もちろんそんなの当たり前だと思えます。面識もない私と、いきなりこんなことになっているんですから。でも、心から楽しんでない翔さんを見ているのは、私のほうが辛いので……」

ああ——それなのに、どうしてこんな言い方しかできないんだろう。

結局私、自分が大事ってことよね。

翔さんがどうこうっていうより、自分が辛いから一緒にいたくないんだわ。

それを言葉にしてから気づくなんて——

「あ、俺の態度が悪いってことか」

「そうじゃなくて。最初から私なんか相手じゃ楽しめないことはわかってるんです。ただ、それを改めて実感するのはいやで……。ただ、それだけですから、ごめんなさい!!」

私は一礼だけすると、駅に向かって走り出した。

行きづまったら、逃げることしかできないなんて——最低最悪。

こんなことなら夢だけ見ているほうがよかった。

夢の中の翔さんは、私に向かってあんな顔はしない。

少なくとも、営業用スマイルぐらいは向けてくれる。

いつだって初めて会った時の笑顔のまま——

「待ってって」

「っ!」

もともととトロくさい私が逃亡を凶ったところで、三メートルも離れる前に捕まってしまうた。

腕を力いっぱい掴まれて——思わず「離して」って叫びそうになる。

「ごめん! 悪かった。俺の態度も聞き方も」

(え? どういうこと)

先に謝られて、悲鳴が引っ込んだ。

澄んだ瞳でまっすぐに見つめられて、こんな時だっというのに、胸が高鳴る。

私、どこまでこの人が好きなんだろう?

掴まれた腕が痛いのに、それさえ嬉しく思えてくるなんて。

「言われてみたら、今日の俺はそうとう不機嫌丸だしだよな。久しぶりにのんびりしようと思ってたのに、いきなりデートの予定をねじ込まれて。しかも、今日の仕事がまたゴタゴタして……腹が立つことばかりで。けど、態度が悪かった理由はそれであって、お前のせいじゃないから」

翔さんは順を追って、自分の状況を説明し始めた。

「それに、これを企画した奴ら、俺に金を寄こしただけで、なんのデートプランも立てなければ、レストランの予約すら取ってなかったのが、今さっきわかったんだ。全部俺任せで行き当たりばったりでやり過こせて……。だから、これで好きなものを買っていいぞって言ったほうがいいのか、何が食べたいって聞くべきかとか考えて」

うわっ。かなり杜撰な企画だったみたい。

そりゃ、機嫌も悪くなるよね。

「ただ、そう思って中身を確かめたら、福沢どころか樋口が一枚しか入ってなくて……。あいつら、はなから全部俺に丸投げかよと思ったら、余計に腹が立ってきて、ずっと文句メールを送ってたんだ。それで……。でも、言われたらそうだよな。面識のない相手にいきなりこんな態度で来られたら、誰だっていやだもんな。だから、ごめん」

説明しながら出された茶封筒には、五千円札が一枚入っていた。

これで数時間なら、かなり贅沢なデートができるんじゃない？ って私なら思うところ

るけど、翔さんはそうじゃないらしい。

やっぱりシンデレラのデートなんてコンセプトがあるから、奮発しないとって考えちゃったのかな？

別に——私はコーヒーショップで話ができるだけでも十分なのに。

「許してもらえるか？」

「はい。私のほうこそすみませんでした。勝手にいじけて」

私はこうして説明してもらっただけで、すでに満足だった。

翔さんの律儀っぷりというか、誠実さというか、咄嗟に「ごめん」が出てくる人だったんだってわかっただけでも、すごく嬉しいから。

確かに喜怒哀楽はそうとう激しそうだけど——彼の「ごめん」からは、反省と優しさの両方が感じられたしね。

「でも、理由を聞いたら安心したので、ここから先は——。私、帰りますから」

私が好きになった人は、やっぱりいい人！

人間的にとってもできてる。

これは夢でも妄想でもない。

それがわかっただけでも、十分って。

「だから、どうしてそうなる!!」

「だって、のんびりしようと思ってたって……。だから、私のほうはお構いなく……」
 なのに、それなのに、彼はまた怒った。

笑顔で去ろうとした私の腕をいっそう強く掴むと、本気で「そんなの納得できるか！」って。

「何がお構いなくだ。お前、俺の面子は^{メンツ}どうでもいいのか。ここでそんな風に言われて帰られたら、俺が可哀そうだろう」

「どうしてですか？」

思わず私も聞いてしまった。

だって、普通はラッキーじゃないの？

こんなことから解放されるのよ。なのに可哀そうって、このまま意に沿わないデートをし続けるほうが、よっぽど可哀そうなことじゃないの？

すると翔さんは、気分を害したようだったけど説明してくれた。

「どうしてって……。お前を餌にしたら募金の集まりがよくて、効果絶大だった、さすがわが社一のイケメンだ、恋人にしたいナンバーワン男だとかっておだてられて来たんだぞ。それが、チャリティ参加のつもりしかなかったからデートは結構ですって言われたら、俺の立つ瀬がないだろう。普通に傷つくじゃないか」

(そういう、ものなの？)

要は、私にはわからない面子——男のプライドの問題だったようだ。

でも、これって私の説明の仕方が悪かったってことよね？

翔さんに気を遣って「チャリティだし」って言ったのが、かえって話をこじらせて——「……っ。すみません。でも、せっかく仕事がない週末なら、邪魔したくないなって。あとからつまらないことに時間を取られたって思われたら悲しいかなと思って……」

正直に口にする、自分のネガティブさが露見した。

好きな人に悪く思われたくない。そんな、ただの自分勝手なだけな私が、あれよあれよという間に露わにされる。

心の内を晒すって、怖い。

それなのに——

「そう思うなら、お前も俺を楽しませろよ。これからどうするか、少しは一緒に考えろ」
 翔さんはそんなの気にも留めずに、私が想像もしていなかったことを返してきた。

「一緒に？」

「はなからおんぶに抱っこで、俺任せにするなってことだ。だいたい、これが宝くじの当籤だって言うなら、換金したあとの金の使い道は自分で考えるだろう。少なくとも俺は、お前が満足しなければ役目は果たせないわけで、肝心なのは俺がどうこうじゃない。この企画に関しては、お前が満足するかどうかにかかっているんだから、とりあえず何を

「したいか言ってみろよ」

しかも、どこか悪戯いたずらな目をしてニヤリ——

「どうして気を悪くした相手に、そんなふうに見えるの？」

「……っ」

「なぜ黙る」

「いえ、だって……。本当の宝くじなら、定期預金にして老後に備えますけど、そういうわけにもいかないから」

そして、どうして私はこんなときに、こんなことしか言えないの!?

たぶん、こういう意味で聞かれたんじゃないってことはわかっているのに、うまく答えが見つからない。

「は？」

「だって、一億円も当たったら、とりあえず貯金しませんか？　するでしょう？」

かといって、ここでまた彼のことを考えて気を回したって、失敗するのが目に見えるから、思いつくまま口してみたんだけど……

私、会話のセンスゼロだわ——

「俺、お前にとっては一億円の価値なのか」

さすがに翔さんも呆れた顔をした。

「っ！　あ、すいません。貧困な発想で。翔さんはもつとすごいです。将来わが社を背負っていく立場の方ですし、お金には換算できない方だと思います。ごめんなさい！」

私は言い返されてハツとする。

そうよ、人様をお金にたとえるなんて、どんな失礼!?

ましてや資本金八百億円の会社の社長子息に、なんてこと言ったのよ私——!!

(もう、帰りたい。このまま地下に潜って、一生隠れていたいわ)

これが夢なら今すぐ覚めて!

現実なら、どうか五分だけ時間を戻して!

私は下げた頭が上げられない。

このまま二度と、翔さんの顔が見られないかも。

でも、どん底に落ちていく私の耳には、翔さんの笑い声。

「くくく。謝るなよ。たかが数時間のデートに、一億の使い道と同じだけ悩まれたってわかって、怒る男なんていないよ。むしろ、光榮。なんか、おもしろくなってきた」

「え？」

これって聞き間違い？

そうでなければ今、彼は私といって「おもしろい」って言ってくれた？

「ラッキーだったのは俺のほうかもしれない。お前、一緒にいて飽きないわ」

嘘！嘘、嘘、嘘！

今すぐ自分の頬をつねってみたい。

「本当ですか？ それ」

それはできないから、こっそり手の甲をつねってみた。

痛い！ちゃんと痛覚がある！！

「俺は仕事でもお世辞と嘘は言わない主義。けっこう有名じゃない？ これ」

「あ、はい。そうでした。聞いたことありました」

数秒前の憂鬱な気持ち^{ゆううつ}が嘘みたいだった。

「なら、改めてよろしく」

「はい。よろしくお願います」

翔さんのほうから手を出してもらって、握手をしてくれるなんて、明日の関東地方は大雪かもしれない。

「じゃ、とりあえず抽籤会^{ちゆうせんかい}に申し込んでから当籤決定までに妄想したこと教えて」

「え？」

ちよつと距離が縮まって話がしやすくなると、翔さんの人懐っこさ^{ひとづら}というか、持ち前のフレンドリーさは全開になった。

いきなり肩に手を回され、耳元に顔を近づけられて、こそつと話しかけられる。

「それで元が取れるぐらい、あれこれ想像したってことだろう？ 俺との楽しいデートってやつを。だから、その通りにしてやるのが、一番かと思って」

「えっ、えつつつつっ！」

翔さんの言い回しは、相変わらず悪戯^{いたづら}っぽくて、私をからかっているみたいだった。

「何？ 真っ赤になるほどヤラシー想像までしたのかよ。夕飯食って、ことのほか気が合って、そのまま朝まで絡みまくってとか」

頭を左右にふるふる振る私の狼狽^{ろうたい}ぶりが可笑しかったんだらう。どんだん言うことがエスカレートしてきた。

「そんなもんじゃないって？ じゃあ、更にそのまま付き合うことになって、結婚までいったらどうしようとか、そこまで妄想した？ 一億円と同等って言ったら、それぐらい考えてもおかしくないもんな」

さりげなく、ごく普通に、とんでもないことも聞いてくる。

私はとうとう何も言い返せなくなつて、ひたすら頭を左右に振り続ける。

「——じゃあ、正直に言ってみろよ。この際、樋口の存在は気にしなくていいから、どんなデートを妄想したんだ？ お金には換算できないような、社長子息を相手にさ」

これじゃあ話もデートも進まないと判断したのか、翔さんがいきなり私の頭を押さえこんできた。